目次

□經驗的人生と生物學的倫理觀　千葉安良
□詩と宗教　三浦みねよ
□傳記と文學　山口さき
□東京と地震（承前）　比良靜江
□綾部君碑銘　細田劍堂
□首夏の歌　尾上柴舟
□和歌　堀尾とめ　三島浦子　つきぐさ　L. T. ピーボー
□寄宿舍の楠の木　堀尾トメ
□曉　坂井貞
□校庭の春
■第三十五回文科學術談話會記事　會計報告　會員動靜

經驗的人生と生物學的倫理觀

千葉安良

談話要項

一、序論

イ、本談話を理解するための準備的考察。

1. 「あたりまへのこと」と「判りきつたこと」と。

2. 科學的考察は人性の自然より發生せるものなること。

ロ、談話題の意義の解說。

1. 生物學的倫理觀の意義及び之れに對する批評が今日の談話の主目的なること。

2. その批評の立脚地を經驗的人生に定めしこと及び經驗的人生の意義。

二、本論

イ、現今の精神科學上に於いて及び一般人士の常識的見解に於いて、生物學的見解が重きをなせること。

1. 科學の職能と假說の性質

2. 精神科學上に於ける假說――其中生命に關する哲學說中、生物に自己保存種族保存の二傾向あること。

3. 學說として此の假說の成立せる由來。

4. 此の假說と生物學の研究との密接なる關係、並びに精神科學の基礎學としての生物學の現今の科學上の位置の重きこと。

5. 常識的見解と生物學の主張との一致せること及び生物學的見解の一般人心を支配せることのの深きこと。

ロ、倫理の生物學的見解に對する吾人の態度。

1. 吾人は此の見解を或程度までは採用するも、絕對的盲目的にこれに沒頭すべからざること。

2. 生物學の主張の紹介、

3. 基礎學としての生物學の將來に就ての批評。
4. 生物學的見解を倫理觀に採用するに就ての注意――採用の範圍は殊に愼重に考慮するを要すること。及び生物學的見解の不滿を補ふものは、絶對的境地に即しての吾人の生活なること。

○本論のロ以下が、此の一篇の主張の眼目であります故、そのお積りで御覽を願ひます。

何か話をするやうにとの皆樣の御言葉に依りまして、只今此の壇上に立つことを、得ましたことを、先以つて感謝いたします。

一、序論のイの1. 「あたりまへのこと」と「わかりきつたこと」と。

さて、人間といふものは誠に妙なもので、色々なことを色々に考へるものであります。今、私は此の壇上にかうして立ちましたが、それに對して皆樣は別に不思議とも何ともお思ひになりません。それは今日私が此處でお話をするといふことは既定の事實であつて、皆樣には判りきつたことであるからなのであります。所が此處に一つの俗謠があります。「雨の降る日は天氣が惡い、犬が西向きや、尾が東」といふのであります。誠に當り前のことで、人を馬鹿にして居ると苦情をお云ひになるでせうが、それは兎に角、これを滑稽に聞きにならない方はお一人もおありになりません。次には今お互みんなの意識をつい先達ての五月廿八日の朝まで舞ひ戻らせます。「お早う、好いお天氣ねえ、」「ほんとに好いお天氣ねえ、ごらんなさい、あの空の奇麗なこと」「きれいねえ、何といふ好い氣持でせう」と。こんな當り前の事をお云ひ合ひになる會話は彼の朝に幾度繰り返されたか判りません。然もその時はその當り前のことをお云ひになりお聞きになつて、むしやうに嬉しがつていらしつたのでした。「そらご覽なさい。だからいはないことではないのに、今朝人の云ふことを聞かなかつたから、そんなに濡れ鼠のやうになつてしまつたのです。切角の着物がだいなしではありま

せんか」唯でさへ涙がこぼれさうなかういふ場合に、こんな當り前のことを云ひますと、氣の弱い子供なんか泣き出してしまふにちがひありません。かうなつて參りますと、當り前の判りきつたことが中々一通りの單純なわかりきつたことゝしてすまないといふことになつて來るのであります。わかりきつたことを見たり聞いたりして、をかしかつたり、何とも思はなかつたり、悲しかつたり、嬉しかつたり、めい〳〵がてんで勝手な眞似をするのであります。「それは當然のことです。それ〴〵その判りきつたことにぶつかる時の事情が違ふからさうなるのです」と、今、第三者の位置にある貴方方は仰しやるにちがひありません。併し御自分御自分がその當面の役者になつてそれに出遇つて居る瞬間には、それは一々自覺されては居ないので、あたりまへのことであるがお天氣で嬉しいなどとは、誰しも思はないのであります。それでお互に、少し考へればあたり前のことをあたり前でないやうに思つたり不思議に思つたり、同一の事件に對しても、各人が各樣に解して行くのであります。現に今日の同じ我國の社會狀態に對して、只今のお話のやうに或方は七夕祭がすたれてゆくのは惜しい、在來の風習はこれを維持して行きたいとお考へになるかと思ふと、又他の方は、我々はどうして過去の道德にしばられて行かなければならないのであらうかと、舊來の風習に對して反抗の聲をお上げになるといふやうな譯で、同じ現象からも、いろ〳〵の點を色々に見てとるといふことになりますと、當り前の判りきつたことがいろ〳〵不思議なやうにもなつてまゐります。それで今日の私の話もつまりは當り前のことを考へて、當り前の決論に達する次第なのでありますが、そこに行き著く迄に少し許り手數のかゝつた考へ方をして見ようといふのであります。

序論のイの1. 科學的考察は人性の自然より發せるものなること。

次ぎにはかういふことを考へていたゞきます。今急にあなた方の足許へ蛇がちよろ〳〵と走つて來たとお思ひになつてごらんなさいまし。本氣にさう信じるのです。きつとゾッとなさるに違ひありません。そして足をすくめたり、又はとび上つたり、聲を出したりしさうな氣におなりなさることゝ思ひます。又次に「どなたでもよろしうございますから、此處に出ていらつしやい、アイスクリームを御馳走いたします」と、眞面目になつて此處で叫んでゐる人があるといたします。それがあなた方の信ずるに足る人であるとすると、「行かう、出て行かう。」と腰をおあげになる方があるに違ひありません。所で此處へ來ようと思はれたのも、飛び上りさうにおなりになつたのも皆、あなた方の精神の內面からの働きであります。此の頃のハイカラな方は御自分で御自分が信じられないなどと平氣で易々と言つてのけて居られるやうでありますが、そういふ御方でも、御自分でこれは本當にかうなのだと思ひ込まれたことほど強く御自分を動かすことはないのであります。腕白小僧が遊び仲間の年弱者の顏をピシヤリと擲つておいて、お前の顏が此の手に當つたんだと言ふのと同じ位の、我儘な眞實に遠いことでも、自分の考へ出したことだと、さう思ひたいことは、さう思はせてしまつて平氣で居るといふのが普通であります。實際私共が毎日々々を暮らして行くのには、色々と出遇ふ事柄に對してどうしても自分の判斷に委せ頼つてそれを速かに反射的に行つてすませて行かなくてはならない場合が多いのでありますから、自分を信じて行くとか、主觀に頼つて生きて行くとかいふ自覺に無しで、しかも誰れでも此の自分の精神の聲といふものに從つて暮して居るのであります。それ故、もしもその精神の聲であると、即ち自分の解釋であると、今の蛇が居るとかアイスクリームが貰へるとかいふ考へも事實として從つて行けることになります。所が御同樣に自分の考へといふものが、さう直ちに安心して信頼することの

できる性質のものでないらしいのであります。（自分が信じないといふのではなしに、自分はいくら信じても、完全に信頼するに足るといふことは言はれないとの意）即ち若し眼球內の構造の或部分が普通の人と違つて居りましたならば、所謂正視と言ふことが出來ないと同じに、若しも我れ我れの意識過程に普通の人と異る所があるとすると、それはその人の精神の作き具合に普通の人と異つた所を生ずるといふことになるのでありまして、その意識過程といふものは今日の我々の智識では十分に說明し得ない即ち知悉し得ないものなのでありますから、誰でも萬事に對して簡單に「絕對に自分の考が正しい」と言ひ切つてしまふことが出來ないことになります。しかし又「絕對に他人の考が正しくて、自分のが誤つて居る」とばかりも言へないので「まちがつて居るかもしれない、まちがつて居ないかもしれない。」といふ誠にあやふやなことであります。其處で昔から人間と言ふものは、自分の考への正しいものであるといふことをどうかして確めたいといふ努力を意識的にも無意識にも行つて居るのであります。所謂客觀に頼るといふことはかゝる要求のものに起つたことであると解せられるのであります。この樣なわけで、各人が自身の意識過程にのみ頼られないといふ直覺を有することゝ、意識過程の轉移の複雜さを、意識それ自身が不思議に思つて「何故」といふ疑問を發したことゝに因つて、思慮とか推理とか學問とか科學的研究とかいふものが、人間の間に發達したのであると、考へられて居ります。科學的研究といふことに就いてはなほ後に今少し委しく申し述べる積りでありますが、とにかく所謂主觀と客觀との交涉によつて成立して居るものであつて、その兩方ともの確からしさの最も多く含まれて居ると思惟せらるゝ方に方にと進轉しつゝあるものなのであります。そしてこれからお話し致しますことは、その科學的研究と云ふ人間の共有意識が考へ出したことの一端であると御承知を願ひたい

のであります。

序論の口の1. 生物學的倫理觀の意義及び之れに對する批評が今日の談話の主目的なること。

なほその次にも一つ考へておいていたゞきたいことは、人間と云ふものは、何か異常のこと苦しいこと困つたこと不自由なことに出遭ふと深くその事に注意を向け考へるものであるといふことであります。譬へば「かゝ樣、侍と云ふものはお腹が空いてもひもじうない。」といふ先代萩の千松の悲叫は空腹をこらへ〳〵た揚句に發したのであり、手を怪我した人は初めて手のことを深く考へる、水がなくなると水のことを思ふと、かう言つた所が人間にはあるものであると御承知になつていたゞきます。

次ぎに私共は生れ落ちると直ぐから社會生活を營んで居ります。相對的の生活であります。即ち生れ出たとすれば少くとも父母があります。多ければ兄弟姉妹、祖父母、伯叔父母、從姉從妹從兄弟、甥姪などのあらゆる親族姻戚を始め、召使同居人などの所謂家族といふものから隣保鄕黨知己の人々などの多くの人間に圍繞せられて育つものでありますことは御承知の通りで、人を知らないとか、人に揉まれないとか稱する者でも、生れてから相當の年配に達するまでに接した人々をあげて見ましたら、隨分多勢の人々と交渉を重ねて來た筈なのであります。そしてその多勢の自分を圍繞して居る人々に對して自分の爲すべき道、及び同じ人間の一人である自分に對する心得、それ等を人倫とも倫理とも申します。此れ等のことは皆樣がもとよりよく御存知のことでありますから倫理の字義定義などを委しく申し述べることは略しまして、その人倫なり倫理なりに對する見解を倫理觀と申します。觀の字義は支那の字典によりますと、物を分別思量する能力といふのが本義でありまして、更にその分別思量したことの結果の思想の集積をも同樣に觀と稱へます。普通

には見方と申してをります。それで誰れでもその人自身の倫理上の分別思量を我が倫理觀と稱へ、或る第三者の倫理上の分別思量はこれを彼の倫理觀と申します。又或る倫理上の分別思量を述べた思想がありまして、それが人情を土臺として立論してあるとすると、それは人情主義の倫理觀と稱へることになり、又人倫は人が社會的生活をなすによつて惹起せらるゝことであるから、その社會生活の科學的研究即ち社會學の所說を基礎として專らその考慮に重きをおいて立論するといふことになりますと、それは社會學的の倫理觀と言ふことになります。それと同樣に、本日の談話題として揭げました生物學的倫理觀といふのも、人間は何といつても他の動物などと同じに生物の一種である以上、我々の爲す種々樣々の事象も、當然その生物を支配する法則以外に出づることは免れ難い。であるから倫理現象もその解釋思量の根本概念を生物學で研究して歸納し得た所の生物を支配する根本法則に置いて思量すべきである。とかうかんがへて、倫理觀を生物學研究の上にうち立てようとするもの、實際生物學的法則から倫理觀をうち立てゝ居るもの、それを指して申すのであります。此處に一寸御斷り致して置かなければならないことは、これも御承知のやうに、倫理に就いて研究する科學は倫理學でありまして、所謂近世の倫理學と申すものは、生物學、心理學、社會學の基礎の上にうち立てられてをるのでありまして、更に哲學によつてその根本原理設定の可能を證明して貫つて組み立てられて居るものでございますから、倫理學といふ以上は、無論社會學的考究も、生物學的考究も含んで居るべきものなのでありますから、社會學的倫理學とか生物學的倫理學とかいふ必要はないのであります。實際生物學的倫理學などゝいふことを唱へた人はないのであります。でありますから生物學的倫理觀と申すことは不穩當なことではないのではあるまいかといふと、決してさうではないのであつて、此の倫理學の系

統の内には生物學的の倫理觀といふものが入つて居り、又ヘツケル、ウオーレスを初め多くの生物學者側から此の生物的倫理觀といふことが稱へられて居るのであります。これは學と觀との相違によつて直ちにそれで差し支へないのであるといふことがお判りになる筈のことであります。卽ち觀とは先程申しましたやうに、物の思慮し方・見方でありまして、たゞぽつんと或る一つの斷片的知識に對しても觀はあり得るのでありますが、學となりますと、これは一條の一貫の理を定めて物事を研究する方法、及びその研究の結果の集成を云ふので、所謂系統的知識なのであります。それ故ミルクキャラメル學といふのは成立して居ませんけれども、我がミルクキャラメル觀といふものは、速刻にも成立し得るのでありますやうな次第で、御承知のやうに倫理學の無い前から倫理觀はあり、倫理學を知らない人でも倫理觀は有つてをり、生物學的倫理學とはいはないが生物學的倫理觀といふ事は言ひ得るのであるし、實際そういふ思量があるといふ次第なのであります。

所で少しあと戻り致しまして、我々は何か異常のことに出遇ひました時に、それに就いて考慮するものなのであることは、前に申した通りで、此の觀といふものは、人々が或る事柄に對して思慮せねばならなくなつた場合に前々から感得して潜在識中に保持せられて居た事が、顯在意識に於いて思慮せられて、鮮やかな思想にまとまつたものなのであります。乃ち我々の倫理觀と言ふものは、人倫現象中において、何か異常な事に出遇つた場合に、(その事の大小に拘らず)我々の本來内面の心中から油然として湧き起つて來るものなのであります。例へば「武士は食はねど高楊枝」といふ倫理觀も、德川中世以來の一般武家の逼迫した經濟狀態の事實が當時の武人の精神を刺戟して考へさせた結果、その經濟狀態の苦しさと、武士道敎養の武士の品

格といふ思想との間に、内面的の交渉があつて生じたものでありまして、一面に武士の僞勢を張るといふ結果を來たし、又一面に崇高な武士の性格といふものをつくり出してをります。「一切食ふ役」(一切苦厄)といふ下品な洒落の數句の中にも、中々穿つた倫理觀が含まれて居りますし、又「石龜のじだんだ」とか「長いものにはまかれろ」とかいふやうな因循な思想も古來の我が國人の倫理觀の一面を見得るものなので、それ等はみな處世上の實際の件に就いて考慮させられた結果生じたものであります。そしてかやうな通俗な倫理觀は所謂諺といふものとなつて、時代から時代へ流行して居るものなのであります。此のやうに倫理觀の發生はもと個人にとつては内發的のものなのでありますが、個人はその所成の思想を社會へ寄與し、社會は一時代から次の時代へと、言語文章によつて、その思想を遺し傳へて行き、老いたる者は若き人に我が經驗を敎へるといふ事がありますので、相當に文化の芽が生じましてからの社會に於いては、各個人が抱いて居る倫理觀には、決して内發的に自ら體認したものばかりはなく、文化の賜として、書物なり口授なりによつて、外發的に抱かされるやうになつたものも澤山あるのでありまして、修身敎授といふものは、此の倫理觀の正當有益と思惟せらるゝものを、外發的誘導によつて將來世に立つ準備時代にある兒童や青年の心に植つけようと骨折るものなのであります。あなた方や私どもも、まだ〳〵此の外發的倫理觀に支配せられて居る事が多いのであります。かう申し上げますと、成る程、私の倫理觀は殆んど全部外發的のものであると、お氣がおつきになる方があるかも知れないと存じます。さういふ御方は、主觀的に最も幸福な境遇を經て來られた御方であります、そして、此の外發的倫理觀に從つて居るといふ事は、將來その必要が起つて内發的倫理觀を懷くやうになつた場合に、前の反動によつて、その内發的のものを強く深く玩味するといふ事もありますし

又先人の經驗せられた種々の事件に對する最良の思慮法と處置法との精髄を傳へられて居るわけ故、その通りに從つて行けば、非常な精力經濟にもなる都合で、子供としては親に、生徒としては師の命によく服從すべきであるといふ原理が立てられるのであります。話が少し横道に入りましたが一寸御參考にもと存じて申した次第であります。所で今日の大人の世界を見渡しますと、此の倫理觀を内發的に懷くやうになつて居ない人は殆んど一人もないと云つてもよいのでありまして、それで世間には色々の倫理觀が漂つて居るわけであります。そしてその多くの倫理觀の内に於いて、生物學的の倫理觀が最も根强く世人の心を動かしてをるのであります。例へば先刻擧げました二三の諺は、我々の理想的方面にはよほど遠ざかつて居るやうな氣持ちのするものでありますが、「あらゆる生物は產れて食べて產んで死んでしまふものである。そしてそのための經營とその事物から起る生存の競爭とその方法と、その結果といふものがあらゆる生活現象を生じたのである。」といふ生物學的の見方にはまことによくあてはまつて居るものでありまして、この見方は實際我々の人間生活にはかやうな生物學的法則に支配せられて居る部分もずゐぶんある所からして、此の世の中の實際生活から必然的に產み出される思慮でありまして、又一面には今日の各種科學の隆盛に伴ふ生物學それ自身の進歩と、その重きを置かれる位置にあることゝ、一般科學知識の普及に伴ふ生物學知識の弘布とによつて、現代人の頭の中に生物學的知識がよほどつぎ込まれて居るといふことゝによつて、かうなつて居るのであるらしいので、今日はそれを些か批評してお聞きいたゞきたいと存じて、その批評の立脚點を、この經驗的人生に定めたのであります。

序論のロの2. その批評の立脚地を經驗的人生に定めしこと及び經驗的人生の意義

經驗的人生と申しますのは、私どもの人生全部を包攝して居る言葉でありまして、一つの取り除きもおかない私共の人生それ自身を指したものであります。委しく申しますと、人生とは、人格といふ形式内容を備へたエネルギーによつて統一せられたる意識の、發生から消滅します迄の連續を指すのでありまして、更に約言いたしますと、意識の連續が即ち人生といふ簡單なことになるのであります。判り易く人の一生の凡てと考へておおきになつても差支へありません。然らば經驗的人生とは何であるかと言ひますと、我々の各自各自が實際に經驗して營んでゆく人生といふことなのであります。即ち我々の經驗し意識し得る生の全面を指すのであります。それならばその經驗とは何であるかとお聞きになる方が、おありだらうと存じますが、それは我々が實際の事物に接して知得し感得したる所の知識感情熟練等を指すのであります。(元良博士の說に據る) 別にむづかしく申さなくとも、お互の常識がこれを肯定することは容易であらうと存じます。(經驗について登山の例をとりて解說せるも、煩しく判りきつたこと故省く) それで實際私共が自分自ら經驗して行く人生といふ意味で經驗的人生と申したのでありますが、人生といふことそれ自らが意識の連續を意味して、經驗の連續であるといふ事は此の語に含まれてをるのでありますが、動ともすると、人生といふ語は、欠びをしたり落し物をしたり、おにごつこをしたり、夕食後に一寸運動場で唱歌をうたふと言つたやうな些細な事柄は除外してしまつた概念的のものを指す傾が有りますので、殊更に丁寧にかく申した次第であります。

そこで生物學的倫理觀の批評を試みようといふ私のもくろみは、此の頃は生物學的倫理觀が、隨分多くの人の考を支配して居るやうであるが、我々はこれをどう考へたらよいものであるか、即ち私どもは全然此の

見方に賴つて行くべきものであるか、又全く賴らない方がよいのであるか、それとも幾分は賴るが全然賴るといふ事はしないといふことになるのかを、きめて見たいといふのにあるのでございます。

二、本論のイの1.　科學の職能と假說の性質

それには先づ第一に、此の生物學的の考案が今日の精神科學上に重きをなして居ることを申さねばなりません。そしてそれを申しますについては、一通り科學的考案について說明する必要があります。皆樣が實際御經驗なさいます樣に、又兒童心理や敎育學の書物にかいてあります通りに、子供が三四才になりますと、しきりに、何、何故といふ疑問の言葉を發するものでありますが、これを好奇心の發動とも求知心の初めとも申して居ります。これと同じやうに、我々の祖先も文化の發達がその黎明に達したとも言ふべき頃から、あらゆる接觸するものをきはめたいと言ふ心持ちを起して居たのでありました。或學者は「人間は人間以上のことを研究し覺知することが出來るかどうかは本當には判らない。しかし古來大學者、大思想家がみな此事に志を致すのを見れば人以上のことを知らうと欲するのは、人間の天性であると言ふことができる。」（稻田氏）と申して居られますが、かくしてものゝ本源を究めたいといふ心は、一方には古代の神話となつて表はれ、一方に古代の哲學となつてあらはれまして、それは殆んど何れの地方にも有せられて居たといふ有樣であります。かくして所謂學問といふものが起りまして、それが進步して、今日では所謂科學的研究法を以て、物事を究めてゆくこととなりました。此の科學的方法は、今日の人類が最も確實な知識研究法として信賴いたして、居るものなのでありますが、此の科學の任務は、經驗的事實の單純化といふ事にあるので、その任務上の方法として、物事の性質とか、物事の關係とかを、それからそれへと追究いたしてまゐります。すると

その極どうしても、今日の人間の知識では、それを事實としては認められるが、その事實以上に、その事實現象のおこる原因は說明はできない、その現象のおこる委細の現象は明かにし得ないといふ所まで達するのであります。併し乍ら、それを事實としてその儘に認めさへすれば、その上に立つてちやんと一つの立派な系統的知識を建設し得るといふ事になると、あらゆる方面からあらゆる方法で、その事實の確實さを試驗した上、事實としては間違ひないといふ事になりますと、それを土臺として、その上にそれ〴〵の一科學を建設することとなつてをります。例へばニュートンの萬有引力の說でも、マイヤー、ヘルムホルツ等によつて唱道せられた精力不滅說でも、皆一つの確からしい事實と認め立證せられた事でありまして、斯樣な科學の根本に置かれる立說を假說と申します。此の頃では物理學や化學における電子說とか電子的物質觀とか言はれて居る假說などが尤も著しいものであります。

本論のイの2.　精神科學上に於ける假說

所であなた方が何か人生問題上の疑問をおこされた時に、その解決を得たいと言つて賴つて行かれたり、又私どもが學校で修身や敎育などを敎授いたす時の論據としたりする倫理學、哲學、敎育學、心理學、社會學、政治學、生理學、生物學などの側に於いて最も重きをなす假說は何であるかといふと、それは生命に關する哲學說でありまして、例の生あるものは必ず個体保存、種族保存の傾向を有して居るものであるといふ說なのであります。

本論のイの3.　學說として自己保存、種族保存の假說の成立せる由來

この說は早く既に三百年も以前からその萠芽を發した說でありまして、十七世紀の初において、近世倫理

學の始祖と稱へられる彼のホツブスが「生物には自己の保全を欲する性質がある。」といふことを發見し申し出したのに起源いたしてをりまして、つゞいて出ました御承知のスピノサがこれを承け繼いで生物の自己保存性を基礎とした倫理說を打ち立てたのであります。それから十八世紀の初に至りまして、英のシャフツベリー侯は「生物にはたゞ自己保全の望があるばかりでなく、又種族保存性がある」といふことを稱へ出されました。それから又一方には、十七世紀にデカルトやスウエーデンボルグ等によつて星の進化說が唱へ出されましたが、それが十八世紀の半頃(一七五五)に至りまして、彼のカントの星雲說となり、つゞいて同世紀末のラプラースの宇宙系体論となりまして、天體進化の行程が明かにせられるやうになりました。それ以來、進化の理が學者間に注意されるやうになりまして、十九世紀に入りまして、その初頭に先づラマルクの生物進化論の發表を見、つゞいてその半頃には、(一八五九)ダービンの種の起源に關する著述が公にせられ、此れと相前後してウオーレス氏の同じ樣な研究が發表せられまして、此處に生物の進化と言ふことが確認せらるるに至りましたが、それ以來の生物學研究の進歩發達といふものは實に目覺ましいものがありますので、生物形態學、胎生學、組識學、習性研究、遺傳研究、細胞研究といふやうに種々の方面に周密な實驗的の研究がいたされまして、此れ等の研究によつて植物や動物の品種の改良を實用上にまで盛んに實行するやうになりまして、遂に彼の人種改良の學さへも稱へらるゝに至つたのでありますが、これ等の研究は皆一樣に、生物に自己保存種族保存の二傾向があるといふことを實證的に證據立てゝ居るのであります。

本論のイの4. 此の假說と生物學研究との密接なる關係並びに精神科學の基礎學としての生物學の、現今の科學上の位置の重きこと。

生物學の研究が一歩進むとそれ丈け生命哲學の根據が深く確實になるといつた樣な調子となつて參りまして、此の天地間の生物に關したあらゆる不思議な現象は皆この二傾向を出發點とした生活活動の一つの方法として解せらるゝといふことゝなつて參りました。秋の夜に霜おく草むらに鈴蟲の美しい聲で鳴いて居るのも、孔雀の羽の美しいのも、蜘蛛が網を上手に張ることも、蜂が螫を持つて居ることも、うみほゝづきの面白い形が如何なる自然の手によつて縫はれるかといふことも、みなどういふ理由からでどういふ爲にせられることであるかといふことは、凡ての生物は生れて食うて產んで死ぬといふことから起る。食するのは個体保存の爲であり、產むのは種族保存のためであり、あらゆる生物のあらゆる習性は皆此處から出立して居るといふことに判つて來ますと、誠に辻褄の合つた話となる。そこで生命あるものゝ活動の凡ては根本原理は此の二傾向を認める所に置き得るし、此の確信は生物學の研究が間違なく與へさせて呉れるといふことになりまして、一般科學者の生物學に對する信賴は著しいものとなつて參りました。そこで倫理學でも人間の利己心と利他心との相反する如き人性の二方向の生因は此の二傾向からとなし、(一般の倫理學者の說、殊にバウルゼン氏所說)又道德の起源も自己保全と、種族保存のための自己犧牲との相錯綜する所にあるとなし、(同前、殊に野明氏所說)社會學が複雜な人間の社會生活の複雜なる現象、商工業の起源にしろ、禮儀のおこりにしろ、風俗の形成にしろ、あらゆる社會現象を說明する根本原理も亦此の二傾向におき、(一般社會學者の所說、殊にデイーレイ氏)極端な立言としてはあらゆる社會現象は人間の性的生活から生ずるといふやうなことまでになつて居て、(谷本博士)それ等は全く此の種族保存說の上に立てられて居るといふ事になり、心理學でも複雜微妙な心的現象發現發達の動因をこゝに求め(發生的心理學、比較心理學の主張)歷史學にさへも

歴史的事實の起因に經濟的方面の考察を加へることによつて此の生物學的研究が加味せられることになつて來たといふわけで、所謂精神科學の根本において、此の假說は牢固たる位置を占めて居ります。それで全世界の多數の知識階級の人々の多くは、我々の活動のすべては此の本性から生ずるものであるといふ事を信じて居るのであります。そして最初にも申しました通り科學的知識の普及に伴つてこれは一般社會にも廣く傳播せられて居るのであります。それで例へば一昨年來の世界的大事件である歐洲大戰亂の原因などもよく研めて見るとその直接の動機は當時喧しく論議せられました通り、パンスラヴ主義とパンゲルマニ主義との衝突であつてその根底の原因は英獨の二國民の經濟的競爭に基く國民的反感が主なことであるといふことがわかりましたが、その人種問題、經濟問題はどうして起るかと、も一歩進んで研究して見ると、それは生物の通有性である所の此の二傾向の複雜なる現れであると言ふ說明を得るといふ事になりまして、我々の生物學的法則に對する信仰は益々深くなつてまゐりました。

本論のイの5. 常識的見解と生物學の主張と一致せる事及び生物學的見解の一般人心を支配せることの深きこと。

其の上、今日の激烈な生存競爭からおこる種々の人事現象は生物學的法則に照らして見るとよく解釋がつくといふやうな事がありますので、倫理觀においても生物學的倫理觀が最上唯一のものであるかのやうに認められて來るといふ事になつて參りました。これは今日の雜誌新聞などに載せられます色々の論義を仔細にお眼を御通しになりますと、直きに御判りになることであります。我々から見ましてその理想が餘り高い水平線の上に無いと思はれますやうな手輕な文藝上の作品などには、著しく此の傾向が認められますし、

又よほど高い水平線上に於いて書いてあると思はれます小說などにも、ちよい〳〵、此の傾向をほの見せて居るのであります。或る人が旅行して、非常に空腹を覺えて居た折にある所で食事をとつたのが大變に味がよかつたと言ふので、その地は料理の旨い地だときめてしまふとしたならば、それは大變不用意な不合理なことでありますが、これと同じやうな不用意さを以つて、この生物學的倫理觀に支配せられて行くやうなかたちになつたとすると、それはをかしな事であると申さねばならないのであります。そして今日の生物學的倫理觀の流行の趨勢はこれに類した所がありはしないかとおもはれます。

本論のロの1. 吾人は此の見解を或程までは採用するも絶對的盲目的にこれに沒頭すべからざること。

勿論私どもも生物には違ひありませんが、私共は人間といふ生物でありまして、既に他の生物と區別して人間といふ名稱を持つて居るだけの違つた點をそなへて居る筈のものなのであります。それ故、一般の生物學的法則に支配せられるとともに、人間にのみ發達し發現して居る種々の性情作用のあることを忘れてはならないのであります。即ち全人生の經驗から見ますと、單に食うて產んで死ぬといふ生物學的法則に支配せられて居る所からは、遙かにぬけ出でゝ居る點があることを知るのであります。他の生物にしても同樣でありまして、蝶なら蝶と申す特殊の生物があるとすると、その蝶には蝶特有の性情があるのに異らないのであります。そしてその特有の性情が、食うて產んで死ぬといふことに即して直ちにそのための生活方法であると認める活動だけして死んでしまふのと、比較して見ますと、人間に於いては、直ちに食うて產んで死ぬといふことには關係のない範圍の活動が大變多いのでありまして、一方の生物學的法則に支配せられてをる所の性向を、生物性といふならば、これは神性とでも名付けて髣髴させることの出來る別異な天地を持つて居る

事が大變多いのであります。即ち所謂眞、善、美の認識啓示に對する吾人の感情努力などは此であります。これは生物學それ自らの研究に賴りまして、生物の實際の生活を、少しでも調べて見ますと、この生物性をはなれた活動の人類には如何に多いかといふ事を知るのであります。もとより全く生物性に無關係に別に發達した神性があるといふのではありません。そこから發達して其處を通過してしまつて、その影を少しも見せて居ない別異な性情を有することが非常に多いといふのであります。(それで生物學の大家である彼のウォーレス氏さへ、生物進化の目的論を稱へて、人間意識の神性を認めて、進化の究竟目的は、人間が宇宙の秘密を開明する所にあると申してをられます。この說に對しては議論もあらうと思はれますが、如何に人間に超生物性の多いことを認めなければならぬかといふ有力なる例として、先日は申しおとしましたが、附記致しておきます)そこで、それ等のあらゆる性情をよく見きはめ研究した上で、はじめて人間の本性より發することは如何なるものであるかといふ事がわかるわけでありまして、即ち人間の經驗するあらゆることは、みなどれも一つもすてずに經驗し研究して始めて眞の人間が判るのでありまして、決して單なる生物學的見地からのみ人間性の一面の表現である倫理上の事をも律し去る事はできないのであるといふ事を考へねばならぬのであります。何千年來を、人間は万物の靈であるといふやうに全く他生物と別にして尊んですごして來た反動として、今日では人間を他生物と同一水平面まで引きおろして、人間も畢竟こんなものだと見る見方が新らしく眞實らしさが多いやうに思はれますので、何もかも人間の性情はこれに色づけられて居ると見ようとしてゐるのが、今日の一部人士の普通の心持ちの樣に思はれますが、決して其の樣な態度は公正を得て居るとは申せないのであります。人生經驗の全部から組み立てられた人間學といふものが若しも成立

したとするならば、それによつてこそ人生のあらゆる事象もあらゆる倫理現象も解しつくし得るでありませうが、生物學的の倫理觀のみを以て人間倫理の全部を解決し去らうとすることはよいことではないのであります。殊に倫理と人生との關係といふ事で論じますれば判りますことながら、倫理觀を以て、全人生を論じようなどとすれば、それは大變無理な妙なことになつてしまふので我々が巧妙な音樂に恍然として醉うて居る際など、それも生物學的に見るとかういふ譯だなどと考へたくないのであります。

本論のロの2. 生物學の主張の紹介

併しながら、我々が科學的認識を正確なものと信賴して居る以上、そして人間も生物の一種である事が事實である以上、何もわざ〳〵生物性が人間性の上にあらはれて來るといふ主張や事實を否定し、わざと生物學の論斷を避けて賴らないやうにする方がよいなどと言ふ理由はもとよりないのであります。それのみならず、生物學の研究は、私どもが人生を解し、倫理觀をうち立ててゆく上によほど多く參考になるものであります。でありますから、これを以て凡てであるとしてしまはないだけの用意を以て、出來るだけ深く此の道の敎をもうけるべきであると思ひます。(學校の圖書室にも大分此の方面の著書は見えてをります)

かういふ意味で、此の道の學習には緣の遠い私が、ほんの僅か自分の常識的修養といふやうな意味で讀書しました內から、生物學の主張のうちの、とつて以て參考とすべき眼目ともいふべき點を御紹介いたしまして、皆樣の將來此の道の御學習を御すゝめ致したいと存じます。

人間が戀する如く他の生物も戀する。人間に苦樂がある如く他の生物にも苦樂がある。人間社會に同盟や契約がある通り、生物界にも戰爭や同盟がある。而して人生を見るに當つてこれらを比較して考へるのと、

人間だけを別にし離して他と比較せずに考へるのとでは、結論の大いに異るは言をまたぬ。芝居で同じ役者が同じ役をつとめても、背景がちがへば見物人の感じも大いに異ると同じで、生物學的法則を背景として、人間なるものを舞臺の上に連れ來つて、日々の狂言を演ぜしめ自分は棧敷から眺めて居る心持ちになつて、虚心平氣に人生を評價して見よ、遊興の場、愁嘆の場、仇討の幕などが、それ〴〵適當な生物學的背景の前で演ぜられる時は、見物人は如何に異つた感じを起すであらうか。かくすることによつて、人生の眞意義をよく解し得たる如き感じが起つたらば、それは生物學の人類に對する任務の一面が完全につくされたるものと言つてよい。(丘博士、生物學講話)

とは、今日の生物學者の吾人に寄與する言なのであります。

又生物の運命に關しては、生物學は次のやうに敎へて居ます。卽ち生物は食べるためにも產むためにも競爭といふ事を避け得ない狀態にある。それ故、

1. 競爭の相手よりも遙かに劣つた種族は、無論競爭に敗れて、絕滅する他はない。
2. また競爭の相手よりも遙かにまさつた種族は凡ての競爭者に打ち勝ち、天下に敵なき有樣に達して、一時は全盛をきはめるであらうが、その後は必ず自己の種族內の個体間の競爭の結果、始め他の種族を征服する時に有効であつた武器や性質が特に發達し、他の方面には之に伴ふ缺陷が生じて、却つて種族の生存に有害となり、終には今迄遙かに劣れるが如く見えた敵との競爭にも堪へ得ずして、自ら滅亡するに至る。

といふのでありまして、此の第二項の立言は、古生物學研究の方から歸納して申されることなのでありまして、此の地球上において、未だ人類が最優勝者でなかつた頃には、色々の生物が全盛を極めて、跋扈して居た時代がありましたことは、地質學の研究と相まつて、各種の地層から出て來る前世界の生物の化石を調べればわかることなので、それ等の生物が今日全く跡を絕つに至つた理由を、解剖的に調べて見まして、此のやうに斷定し得るのであります。前地質時代の生物中、私に最も興味を起させましたのは爬蟲類、殊にその中の龍屬の全盛時代の有樣であります。それは所謂第二期地層のつくられつゝあつた時代でありまして、今から千五百萬年も前の頃でありますが、その頃には爬蟲類が殆んど全地球上に橫行濶步して居たらしいのであります。二三年前までは龍といふものは、鵺などと同じやうに全く人間の想像上の產物であるのだと思つて居りましたがさうではないので、此の事を學び知りましてから、昨年の十月頃、支那の南の方から龍の化石が出て、袁世凱氏が喜んでゐるだらうといふ新聞の記事を見まして、成程昔から支那で龍の著しく注意を惹かれ崇められてゐるのも尤もだとうなづかれたのでありましたが、ずゐぶん大きいものもあつたらしいので、ブロントサウルと名づけられて居る一種などは、身長は六十尺から百尺にも及び、重さは五千四百二十貫位(普通の大人四百六十人分の目方となります)あつた程の大きいものであつたといふことで、それらのものが偉大な翼を張つて空中を疾走してゐたといたしましたならば、實に偉いものであつたらうと思はれます。所がそれ等のものは、その偉大な体軀を支へますために非常に多量の食物を要することゝなりまして、忽ちの中に餌を食ひつくすといふわけで、同じ仲間の間に激烈な競爭が起りまして、その結果、身を守るための裝置と敵を攻擊するための武器とがずん〴〵と發達して、全身には堅い甲を被りおそろしい爪を有するといふやうになつて、優勝者がずん〴〵發達してのこつて益々大きい身体をもつといふことになつて、遂に

地殼の變動による地表狀態の變化などにつれて、忽ち食料の乏しいために餓死するに至つたものであるといふ次第で、此のやうな例は中々一口に申せないほど澤山に此の道の書物にはあげてございます。此の第二項は移して以て、現今の人類の相互に爭鬪する狀態に照して見ることが出來るのであります。つぎになほ生物の運命に關しては、

3. たゞ敵からも急に亡ぼされもせず、又敵を亡ぼしつくしもせず、常に敵を目の前に控へ、これと對抗し乍ら生存してゐる種族は長く子孫を殘すであらうが、その子孫は長い年月の間には自然淘汰の結果、絶えず少しづゝ變化して、全く別種のものと成り終るであらう。長く種族を繼續させるには、厄き生存をつゞけるより道はない。(以上三項、丘博士、生物學講話)

といふ第三項があります。人種問題の研究なども、その古生物學研究の推論からして、生物には存在要件と破滅要件とがあつて、兩方ともに常に生物體を圍繞して居て、その存在要件が破滅要件にまさつて居る間のみ、吾人は生存をつゞけ得るのであるといふ事を說き、此の見地から、各人種相爭ふ人類の將來は、必然の結果として如何になり行くべき筈であらうかといふ事を暗示して居ります。即ち、今日の人類のより賴む所の兵力財力は、彼の第二期生類の堅甲銳牙にも比すべきものではあるまいかと申して居ります。即ち彼等が是等の堅甲銳牙によつて優勝を得、また其等の武器によつて死滅を來す誘因をつくつたやうに、人間の最初の武器は腦と手でありましたが、その手と腦との勝れた働きは、人類のあらゆる文明を生み出し、その文明は人類の生活を保護するが如くして却つて人類のあらゆる生物學的生存要件を弱くした。即ち皮膚は衣服や防寒防熱の優秀な裝置のためにだん〳〵弱くなり、料理法の贅澤は胃をも腸をも齒をもその作きをにぶら

せ、身體の凡ての抵抗力は減退し、文明の進步に伴ふ人口の都會集中と生活難とは、神經衰弱を惹き起さしめ、大團體としての大集團生活は、個人と個人との道德を低下せしめ、又貧富の著しい懸隔も亦同樣に道德の低下を來して、團體生活に不利な狀態に導かれて行かうとして居る。人種改良學は、これ等の點に氣がついて、これを救はうとして居るが、その目的はよいが、その企ては、今日に於いては隻手を以て大河の決するを支へんとするが如きものであると云ふべき有樣である。併し乍らこれあるは、人類が自己の運命を知るの一證である。とにかく我々は當面の急務として、自分の屬する國家の存立を確立することにつくさねばならぬ。食はずんは食はれんのみといふのは、生物生存の第一原則であるが、これは今や人類相互の生活狀態を批評すべき語となつたやうである。如何にして我が種族を維持すべきかといふ事は、我々が自己の存立を顧ふとともに顧みないわけにゆかない緊急な問題となつて居る。即ち我々は、さし當りやはり腦と手との力に依賴して、自己及自己の屬する國家を盛んにしてゆくより他に道はないといふのであります。それ故、此の生物學の人類の將來の運命に關する指導的知識は、我が國民道德の大眼目の一つである所の忠に對する確實なる理論的基礎を寄與して居るものであります。

以上は參考とすべき諸點の內、ごく僅かのものをあげたにすぎないのでありますが、なほこれに對する批評及び此の說を倫理觀中に加味するについての注意を申して見たいと思ひます。

本論のロの3. 基礎學としての生物學の將來に就いての批評

第一に、科學上生物學は生活現象を研究するを務めとしてをりますが、この生活現象はその研究の根本を、細胞の研究におき、生活有機體を一種の機械と見なして、その複雜な構造や組織を還元的に研究するこ

とによつて生活作用を説明せんとする努力に向つて居るのでありまして、此の爲には、細胞の化學的研究に力を入れることになります。即ち生物學の土臺は、化學の領分に轉入して行つて居ります。そして又その化學の根本研究は元素の研究にあつて、その原素研究は彼の電子説が稱へ出されて以來(一八九八)物理研究の部に移り行つて居るのであつて、現今は所謂フイジカル、ケミストレーの成立を見るに至つて居る次第で、今や一切の科學的研究の基礎はこれを物理學に待つといつた有樣になつて居ります。元良先生の心理學なども、精神現象を生理的並びに物理的に解説しようとして居られるのであります。それ故、將來は私共は所謂精神科學を研究するために、生物體を研究するそれをたゞ生物學にのみ頼つて居てもだめであるといふやうになつて行くであらうと存じます。(もとより重要なる位置にあることは變りませんが)これは精神科學の基礎學としての生物學に對する批評で、かういふものであるといふ事を心得て居ることは、此の學の敎へる所を學ぶ上に大變必要なことであります。

本論のロの4. 生物學的見解を倫理觀に採用するに就いての注意＝採用の範圍及び、生物學的見解の不滿を補ふものは、絶對的境地に即しての吾人の生活なること。

次ぎには此の生物學的倫理觀を採用するには注意が入るといふ意味で、我々の衷心からの心持ちで考へると、生物學的倫理觀を以てしては、どうしても解決し得ない德目が、人間の間には行はれて居るといふ事を申して、此の生物學的倫理觀に對する疑義として提出して、此の話を結ばうと存じます。

それは彼の忠と相並んで、我が國民道德の要目とせられて居る孝なる德目に、生物學的見解を投入したらどういふ事になるかといふ事であります。今日の實踐倫理學では、孝行の理論的基礎を、家庭生活の價値

と、人情の自然といふ點において説いてあるのであつて、我々の心情はそれで十分に滿足するのであります がその人情の自然といふ事は、各人が經驗する破りがたい事實でありますが、そのどうして自然に親子の情といふものがあるかといふ事の理論は、親と子とは元來同一本體から生じたものであるから、子が親を慕ふのは、同一本體に復歸せんとする宇宙の大法に合するものであるといふ哲學説に直ちに信據して居るのでありまして、此の點には生物學的考案は加へられてをりません。又實際加へることが出來ないやうに生物學の説明はなつて居ります。即ち、種族保存の傾向といふ點から、親の子に對する愛情の自然といふ事は、十二分に説明し得るのでありますけれども、人間を除く他の自然界の生物には決して子が親を慕ふ心持ちを持つて居、又孝行といふ動作をなすものはないといふのであります。それでありますから、子が親を慕ふ原因は直接には説き得ないのであります。尤も間接には、子が親にはぐくまれ、親の保護を要する程幼弱な間は、子が親を慕つて親から離れずに居るといふ事が、子を保全する上に都合がよいから、すべての生物の幼弱な間だけは子が親を慕ふのだといふ説明はつくので、それだけの現象は生物にも見られることが幾らかあります。併し此の種族保存の傾向に支配せられての親の愛、子の情といふものは、その子が一人前に育ち上るまでに限るといふのが、これも生物界の日常の事實なので、親鳥と子鳥とが同一の餌を爭ひ食すといふやうなことはあり勝ちのことであります。處で此の考へで人間のことを考へて見ますと、人間社會にもこれと同一現象が多く見られるのではないかと言ふことになります。即ちお互に大人となつて居る親子が、ともすれば對立して他の一方を相手どるといふ形を見せることがないでもないといふ事實が中々多く見られるので、若しも我れ我れは、生物學的事實を以て類推するのが至當だといふ事となりますと、茲に大變な破壞的な思慮

を肯定せねばならないこととなつて參ります。食事のお菜のことから母子が喧嘩を初めて、遂に刄傷に及んだといふ新聞の記事を讀みまして、その淺ましさに何とも言はれない感じをいだいた事がありましたが、仔細に考慮して見ますと、これは鋭い眞の現はれとして觀察しなければならないことではあるまいかと、生物學的見地からは認定されて來るのであります。さうなつて來ると、其處に何とも言はれない淋しさに襲はれるのであります。即ちその淋しさは生物學的考察を倫理觀に投入することによつて起つたのでありました。もしも吾人が人間性といふものを認めず、吾々人間も單なる生物學的法則によつてのみ支配せられてのみゆくといふことにしてしまふと、親が子を愛するのはあたりまへだ、子は自己を自己として發展させてゆけばよいのだ、といふやうなことを眞ときめてしまはなければならなくなつて、それ以外に吾々の滿足するやうな見方が出來ないこととなつてしまひます、耳をふさいで鈴を盜むといひますが、我々は今のこの事實をさうは考へたくないといふ事になりますと、眼をふさいで美しからぬものを見ないですますといふ樣になつて、吾人の生活の眞といふ事はうちこはされてしまふといふわけになりて來ます。けれども我々にはどうしてもその生物學的說明の眞といふことによつて滿足し得ない性情があります。親は自己乃至種族のために私共を可愛がつて下さるのだ、私どもはたゞ盲目的に自己の內面にあらはれて來る性情を大事に育てて自己としての將來の發展をはかればよいのだといふことになり、私共は私共の生命の連續を後來に希ひ若くは自己活動の影を後來に殘して世を去りたいといふ希望をもつて居るといふことばかりを肯定せねばならぬやうになると、私共には何故我々がそんなやうにばかりつくられて居るのであらうかと思はれて、名狀しがたい深い悲哀に到達するのであります。そしてそのやるせない悲哀は決して生物學的見解の何物もがといて呉れま

せん。又吾人の相對的生活の何物に於いても此の悲哀をなくなさせるものを見出すことは出來ません。即ち此の悲哀は我々の相對的生活の最根本を肯定し得ない所から起るものでありますから、かゝる見解からかゝる悲哀に到達した時に、あらゆる相對的生活より生ずる享樂興趣は、それが味の深く大きいものであればある程、根本の悲哀を深刻にさせるばかりであります。そしてゆる不調和があらゆる調和に到達せんがための途上葛藤であるといたしましたならは、此の悲哀のかげには、どうしても滿たされない或る物がひそんでゐるといふ事を認めなければなりません。その或る物とは人間性であります。即ち人間の眞本性は、かゝる所を生物學的見解を以つて律し去つて承知して居ないといふ事になります。然らば吾人は如何にして此のあきたらなさを補ふことが出來るかといふことになりますと、それは吾人がその時その儘に絕對的生活に流入して、何等の批評も考察も超越した境地に於いて、悲哀も悅樂も渾一した偕調氣持ちを有ち得る所に見出すといふより他には、道はないと私には思はれます。その絕對境においては、子は親がありがたいと思ふ瞬間に所謂親子冥合の實を現じて間然する所がないのであります。即ち先刻申しました實踐倫理學に於ける孝の見解の哲學的基礎によつて與へられるものゝ方が、此の事實を說いて、より實に近い所まで達して居るものなのであります。そして此の絕對的境地から復歸して再び此の人生を見る時、そこに吾人は更に根抵の深い悅樂を見出し得るものであることは、私どもの實際經驗で申される事でありまして、絕對に即したる相對的生活を、私共は常にいとなんで參りたいのであります。此の樣な次第になつて參りますと、私共は彼の生物學的倫理觀は、私共の人間性が差し支へなく肯定する所まで採り用ひて於いて、それ以上の他の方面の考察には向けないでおく、即ちよい加減の所まででとめておく

といふ事にしなければならなくなるといふ譯になります。そういふ態度をとる事は誠に不徹底な事のやうでありますが、さうしなければ却つて人生をそこなひ人間味を完全に味ひ知る事が出來ないことになつてしまひます。審美的享樂といふ事などは、崇高な人間性のあらはれでありますから、此の方面などは、どんなに向ふ見ずにずん〳〵伸ばしてもよいやうでありますが、それでさへも、先程も御話のあつたやうに、その方面にのみ沒頭してしまふと、倫理的方面に抵觸するやうな事を惹きおこして人生をそこなふに至るのでありまして、近頃やかましかつた谷崎さんの唯美主義といふやうなものを生ずるのでありますし、又眞理の探究といふやうな事も、あまり極端に向ふ見ずにつき進んでしまふと、これは夏目先生の御話の中にあつたとおもひますが、醫者が自分の研める眞理といふ事にばかり熱中すると、自分の妻に毒藥を呑ましてそれを殺してどんなにその藥の反應が起つて來るかを試したくなつても來るといふやうなことになつて、やはり人生をそこなふ不都合が生じて來るのでありますから、それで、これはお若い方々にはお氣に入らない事かも知れませんが、ものはよい加減の所で止まつておくといふ態度をとらねばならないのであります。要するに生物學的倫理觀は、私共の人生を營んでゆく上の大きい指針ともなる者、又考察の興趣をも添へるでありませうが、全然それにのみ依據してしまふことは出來ないものであるといふ事に歸著いたします。長時間御靜聽を煩したことを謝します。（完）（大正五、六、一〇談話ノ原稿）

詩と宗教

（第廿五回學術談話會講演）

私共が斯樣に生活して居りますのに現在の世界と理想の世界との二つの世界を歩んでをります事は、私共の實感によりまして容易にさとる事の出來る事實で御座います樣に、私共の生活にもまた現實を主とする現實生活と、理想を主とする理想生活との二つの生活があるのでございます。

さて現實生活と申しますのは、眼前に見る事の出來る世界を以て私共の生活舞臺といたします所の地上の生活、卽ち外面的自己の生活本能の生活でございまして、これを物質生活とも外的生活とも申すのでございます。次に理想生活と申しますのは、現實を超越した精神上の生活でございまして、私共が物質界を超越し、現實を超越して神靈上に生きるのでございます。この二つの生活がございますので私共はどの樣な貧窮な境遇にありましても、內心の充實さへあれば常に富んだ生活を營み、幸福を樂しむ事が出來るのでございますが、其の代りにまた、如何に富んで居り、且つ榮えてをりまして、外的には極めて幸福に見えましても、空虛に苦しむ內心の訴へが絕えませんでしたならば、この物質的現實的の幸福は少しも私共を滿足させる事が出來ませんで、そこには非常な苦腦煩悶があるのでございます。釋尊が一國の太子として美しい妃の愛を得て、どんな榮華でも心にまかせないといふ事はない樣な境遇にありながら、其の位置を捨て、思愛を捨てゝ山林に入られましたのはこの精神上の苦悶に堪へなかつたからではございませんでしたでせうか。斯